

修士論文(要旨)

2015年7月

中国人上級日本語話者の会話におけるフィラーの使用実態

指導 堀口 純子 教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

213J3905

楊洲

Master's Thesis (Abstract)
July 2015

The Use of Filler by Advanced Chinese Learners of the Japanese Language

Zhou Yang

213J3905

Master's Program in Japanese Language Education

Graduate School of Language Education

J.F.Oberlin University

Thesis Supervisor: Sumiko Horiguchi

目次

第 1 章 はじめに	1
1.1 研究の背景	1
1.2 研究動機	1
1.3 研究目的	1
第 2 章 先行研究	3
2.1 フィラーの定義・機能・種類	3
2.2 日本語教育とフィラー	3
2.3 中国人学習者とフィラー	4
第 3 章 調査について	5
3.1 調査方法:	5
3.2 調査協力者:	5
3.3 分析枠組み	7
第 4 章 調査結果および分析	8
4.1、C グループと J グループそれぞれが用いたフィラーの特徴	8
4.2 中国人上級日本語話者が用いるフィラーの特徴	12
第 5 章 総合的な考察	29
5.1 中国人上級日本語話者が用いた独特なフィラー	29
5.2 中国人上級日本語話者が用いたフィラーの機能	35
第 6 章 まとめと今後の課題	38
6.1 まとめ	38
6.2 今後の課題	39

経済また文化の交流が深まるとともに、日本人母語話者だけではなく、日本語を操る外国人も年々増加している。その中で、中国の日本語学習者数は世界第二位であり、大学、大学院などの高等教育機関で学習する者が5割を占め、中上級レベルに達する学習者の割合が高いことが特徴である。彼らは留学して日本で生活し、日本語母語話者同士の日常談話を観察し、学びつつある。教科書で学んだこともない「アノウ」「エット」なども身に着け、頻繁に使っているが観察できる。しかし、学習者が「言葉が詰まったときには、言いよどみ語が用いればよい」（小出 1983）という知識から使われるフィラーは、指導する必要性が繰り返し主張されてきているが、学習者のフィラー使用実態はまだ明らかになっていないだろう。本研究では、中国人上級日本語話者に自らが使用するフィラーについての理解を促進し、普段あまり意識せずに用いるフィラーの機能や用法を彼らが把握することを助け、フィラーがより自然に使用できるようになるのではないかと考える。そして、その知見を日本語教育現場でのフィラーの指導に生かせるのではないかと考える。

自然の会話データを収集するため、日本語母語話者（以下はJグループと略する）6名と中国人上級日本語話者（以下はCグループと略する）6名を組み合わせ、1対1のペア6組を作り、会話をしてもらった。初対面の会話データである。最低20分間の会話をするように依頼した。得られたのは154分の会話データである。また、音声データを文字化し、文字化のデータからフィラーを抽出して、分析対象とした。中国人上級日本語学習者と日本語母語話者との視線会話データに現れたフィラーの使用数、出現位置、機能を把握することを目的とした。

調査の結果としては、Cグループのフィラー使用数は全発話単語数5341のうち1204である。Jグループの場合は、合計3840の総発話単語数のなかに591のフィラーが現れている。割合を見ると、Cグループのフィラー使用率は22.5%であるのに対して、Jグループの場合は15.4%を示している。中国人上級日本語話者Cグループが日本語母語話者Jグループよりフィラーを多く使うということが分かった。中国人上級日本語話者が使用したフィラーの類型について、山根が分類した9種類はすべて使用された。それは周(2012)の「中国人初級日本語学習者は数少ないフィラーしか使っていない」という結果と比べて、中国人上級日本語話者が使用したフィラーは母語話者ほど巧みに使われているとは言えないものの、使用頻度も、使用種類も少なくないことが分かった。

中国人上級日本語話者が用いたフィラーのタイプの第一位は「ナンカ型」、第二位は「コソア型」、第三位は「ンー型」。それに対して、Jグループが使用したフィラーを類型別に見ると、第一位は「コソア型」、第二位は「母音型」、第三位は「マー型」である。これは、中国人上級日本語話者が使用したフィラーと日本語母語話者が用いたフィラーのタイプの相違点である。中国人上級日本語話者は「ナンカ型」を多く使用する傾向が見られる。

また、自然談話に現れるフィラーとして、それが現れるのが発話の冒頭か、発話の途中か、発話の末尾かによって仕分けた出現数についての分析の結果、中国人上級日本語話者はフィラーが発話中に現れやすい傾向が見られたのに対して、日本語母語話者はフィラーが発話頭に現れやすい傾向が見られた。その原因については、中国人日本語上級話者の場合は会話の文発話中も躊躇したり、文の調子を整えたり、適切な発話を考えたり、次の発話を思案していることが推測される。

中国人上級日本語話者と日本語母語話者が用いたフィラーの機能別使用率は C グループが「談話調節機能」、「発話境界機能」、「対人機能」、「心的態度機能」という順位となっている。J グループのフィラーの機能別使用率は、「対人機能」、「発話境界機能」、「心的態度機能」、「談話調節機能」という順位となっている。果たす機能に C グループとの大きな違いが見られる。つまり、中国人上級日本語話者が用いたフィラーは主に「談話調節機能」「発話境界機能」であった。フィラーを良好な人間関係を構築するための「対人機能」にあまり使っていなかった。これによって、曖昧や婉曲な表現を好む日本語母語話者に対し、中国人上級日本語話者はより直接的な表現を選択する傾向が見られると考えられる。

さらに、中国人上級日本語話者 C グループが発するフィラーを中心として分析したところ、中国人上級日本語話者は山根が分類した9種類のフィラーを用いたほか、中国人上級日本語話者はフィラーとして「ヤッパリ」「コウ」「タブン」「ケド」「ジャ」「チョット」「デ」「中国語フィラー」を使用した。その使用例について具体的に分析し、中国人上級日本語話者が用いたフィラーの特徴として「副詞型」「接続詞型」「母語型」「コウ型」として新たに提案したい。

以上の分析と考察の結果から、コミュニケーション上の問題を解決し、会話をスムーズに進め、日本語母語話者と円滑な人間関係を構築することに対して、フィラーが大きな役割を果たしていることが分かった。そのため、フィラーを学習者に意識的に指導していく必要があると考えられる。本研究で明らかになった中国人上級日本語話者が用いたフィラーの特徴、使用実態と果たす機能の分析結果が、日本語教育現場におけるフィラー指導への示唆になれば幸いである。

参考文献

- 宇佐まゆみ(2007)「改訂版:基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)2007年3月31日改訂版」『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』
<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/btsc.pdf>(最終アクセス日:2014年6月12日)
- エメット啓子(2001).『『なんか』-会話への積極的参加を促すインターアクションルマーカ-』南雅彦・アラム佐々木幸子編『言語学と日本語教育Ⅱ』くろしお出版.
- 金城勝也(2003).「文末表現としての『けれども』の機能について」『言語文化研究要:Scipsimus』10,87-101.琉球大学法文学部国際言語文化学科欧米系.
- 小出慶一(1983)「言いよどみ」水谷修編(1983)『講座日本語の表現〔3〕話し言葉の表現』, pp. 81-88, 筑摩書店
- コーリヤ佐貫・葉子(2003)「夏期留学プログラム参加者のフィルター使用と習得に関する一考察 1」Journal CAJLE, Vol. 5
- 定延利之(2002)『「うん」と「そう」の言語学』ひつじ書房
- 定延利之・田窪行則(1995)「談話における心的操作モニター機構—心的操作標識「ええと」と「あの(—)」—」『言語研究』108, pp. 74-93
- 蔡嘉綾(2000)「日本語学習者の会話におけるフィルターの研究—中国語母語話者を中心に—」東北大学研究科報告
- 周莉(2012)「依頼のロールプレーにおけるフィルター」『日本言語文化研究』第16号
- 庄司恵雄(1998)「流暢とは何か 考察その1:反応速度について『反応速度が遅い』と判定される発話の特質」『岡山国際学留学生センター紀要』第5号, pp. 17-33
- 大工原勇人(2008)「指示詞系フィルター『あの(—)』・『その(—)』の用法」,『日本語教育』138, pp. 80-89.
- 田窪行則・金水敏(1996)「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』3-3, pp. 59-74
- 田窪行則・金水敏(1997)「応答詞・感動詞の談話的機能」,『音声と文法』, pp. 257-279, くろしお出版
- 富樫純一(2001)「あいづち表現形式に見る心内の情報処理操作について」『筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究成果報告書』pp. 27-40, 筑波大学
- 富樫純一(2002)「談話標識「まあ」について」『筑波日本語研究』7, 筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室
- 野村美穂子(1996)「大学の講義における文科系の日本語と理科系の日本語—「フィルター」に注目して—」『教育研究所紀要第5号』文教大学附属教育研究所出版
- 野田尚史(編)(2005)『コミュニケーションのための日本語教育』くろしお出版
- 中島悦子(2000)「あいづちに使用される「はい」と「うん」—あらたまり度・待遇度からみた出現実態—」『ことば』21, pp. 104-113. 現代日本語研究会----
- 中島悦子(2008)「自然談話に現れるフィルター—自然談話録音資料に基づいて」『アジア・日本稿センター紀要』4, pp. 1-23.
- 中島悦子(2011)『自然談話の文化—疑問表現・応答詞・あいづち・フィルター・無助詞—』おうふう出版
- 南不二男(1997)『現代日本語研究』三省堂
- 本間妙(2012)「実質の意味を持つフィルターの談話的研究—特定のインタラクションに表出する「ちょっと」「なんか」「やっぱり」」pp.1-201, 中部大学
- 堀口純子(1995)「話しことばに迫る」, 林四郎編『応用言語学講座第1巻 日本語の教育』, pp250-268, 明治書店
- 山下暁美(1990)「話し言葉におけるいわゆる“無意味語”」『講座日本語教育』第25分冊 早稲田大学日本語研究教育センター